

桜井 哲夫教授の退任記念号に寄せて

桜井哲夫先生は1981年以来本学に37年の長きにわたって勤務され、2018年4月には本学名誉教授の称号を授与されました。これを記念して退任記念号を編むにあたり、先生の業績を振り返りたいと思います。

桜井先生は1973年に東京外国語大学外国語学部を卒業されたのち、東京大学大学院社会学研究科で国際関係論を専攻され修士課程、博士課程へと進まれました。1979年4月からの広島大学総合科学部助手を経て、1981年4月よりは本学経済学部専任講師としてご着任、1982年同助教授、1991年同教授に昇任されています。そして1995年よりは先生も設置に尽力されたコミュニケーション学部の教授として、ご退職まで教育研究にあたられました。この間は研究委員長等の全学的な校務を引き受けられたほか、2000年11月よりはコミュニケーション学部長を務められ、また学校法人理事・評議員の職責も果たされています。

先生の研究上のご業績はあまりに多岐にわたります。先生が世に知られているお仕事の一つにフォーコー論がありますが、一方で2010年代からのご著作でも今村仁司論に戦後漫画論、そして時宗の一遍論と並んでいるのです。ここで私が凡百の言葉を連ね不正確に記しても、先生自らが筆を執られ、各著作成立の背景や当時の思い、また社会的反響を順を追ってまとめられた「自著解題」に勝ることはあり得ないでしょう。そこにもある通りこの解題は2018年1月、雪の中先生を慕う多くの人々の出席した最終講義の配布資料を基にしたものです。先生による解説を通じて、長いキャリアにおける思想遍歴の一端に触れ、圧倒される思いがしました。学外の方と話すとき「桜井先生はお元気ですか」「私は桜井先生の本を読んで…」と言われることも多く、先生はまさに本学の名を高めた大きな存在でした。

一方で先生は、さまざまなものに興味を持たれ、若々しさを感じさせることもしばしばでした。新しく導入した機材等、技術的なことを楽しそうに話されたり、また学部ならではの講義「表現と批評」ではさまざまな映像作品を取り上げて解説され、私自身、未見のものも多く「いま」について行くためつい聴講してしまっただけもありました。思索を深める一方でみずみずしい感性も持たれている、また教授会でも核心を突くことをしっかりと主張される一方で、何かと細やかな心配りもされておられた、本当に仰ぎ見るような先生でした。本学部の「らしさ」を体現していた方がまた一人退職されたことを心細く思いますが、先生の在籍された機関として名に恥じぬよう、学部一同努めていきたいと思っています。どうかご健康に留意され、ますますのお仕事で私たちの蒙を啓いていただきたく願っています。

コミュニケーション学部長 柴内康文